

# 完了表現史にかかわる補助動詞の推移

山口 堯二

- 一 予想と企て
- 二 中世以降の「はつ√はてる」「すます」
- 三 室町期以降の「てのく√てのける」
- 四 近世以降の「てしまふ」
- 五 結 び

古代語の完了の助動詞は、中世室町期、過去の助動詞と併せて「たり」から転じた「た」に統合された。本稿は完了の助動詞「ぬ」「つ」やそれらを統合した「た」との関係を中心に、完了表現の通時的変化にかかわってきた補助動詞の役割とその用法の概要に見通しをつけようとするものである。具体的には、中世を中心に「ぬ」「つ」の各領域とのかかわりがそれぞれうかがえる、「はつ√はてる」と「すます」、室町期以降、「た」とのかかわりにおいて、完了の意を分析的に表す役割を担った「てのく√てのける」、近世以降、広く完了の意を分析的に表す役割を担い、より多様な用法を分化してきた「てしまふ」などの振る舞いを探っている。助動詞の統合に伴う表示性の後退と連動するように、完了表現における補助動詞の役割が次第に高まる通時的変化を確認するものである。

## 一 予想と企て

古代語の完了の助動詞「ぬ」「つ」「たり」「り」は、過去の助動詞「き」「けり」とともに、近代語化の過程で、助動詞「たり」から転じた「た」に収斂し、「た」の一語に統合された。その変化が通時的にどのような過程を経て進化したかについては、すでに探りを入れたことがある。

近代語の助動詞「た」は、その統合の結果、かつての完了の助動詞と過去の助動詞を兼ねるに至り、完了のアスペクトと過去のテンスを併せて担うことになった。古代語の助動詞が個々に持ちえた働きに比べると、「た」の表示力は完了と過去のいづれについても著しく後退したことになる。しかし、完了表現や過去の表現全体として見れば、近代語では助動詞以外の形式によって、より分析的にそれらの意を表現する傾向を強め、助動詞のレベルにおける後退を多分に肩代わりしてきた。そのうち、その統合に伴う、完了の助動詞としての働きの後退については、「すでに」「もう」「すつかり」などの副詞や「てしまふ」などに至る補助動詞による補完と分析化が進んだと予想される。本稿は、そのような予想のもとに、「た」による統合に伴う完了の表示力の後退が、補助動詞の面でのように補完され、分析化されてきたかについて、およその見通しを得ようとする

ものである。

完了の助動詞と総称される古代語の「ぬ」「つ」「たり」「り」のうち、「たり」と「り」は、結果の存続を表す特徴において、自然的な変化の終了を表す「ぬ」や人為的な動作の完結を表す「つ」とは本来めだつ差があった。しかし、「たり」と「り」の間では「り」が一足早く「たり」に統合されたほか、それら本来の結果の存続の表示については、完了の助動詞全体の「た」への収斂に先立ち、変化の進行や動作の継続・反復などのアスペクトの表示も担う、補助動詞「てある」や「てある」によって肩代わりされていたと見てよい。「たり」は「てあり」の縮約形として成立した助動詞であるから、中世における補助動詞「てある」やその類義語「てある」の発達は、かつて「たり」を生み出した連語が後に力を得て子孫の仕事の肩代わりしたようなものである。

「たり」が本来担っていた存続の意の表示性は、自然的な変化の結果にも人為的な動作の結果にも適用されていたので、「たり√たる√た」と変化した「た」は、それ本来の表示性をそれらの補助動詞に一任して身軽になった代わり、その変化にも動作にも適用できる固有の用法の広がりに基づき、残りの助動詞「ぬ」「つ」を統合する役割を担えたのである。「た」による完了の助動詞の統合につい

ては、その意味で古代語の完了の助動詞のうちでも、いわば狭義の完了の助動詞「ぬ」「つ」の働きを中心に考えて差し支えないと言えよう。

補助動詞「てある」や「てゐる」も、すでに述べた意味では、完了表現の通時的変化と大いにかかわりがあるが、それらの登場と勢力の拡大は、むしろ「た」による狭義の完了の助動詞の統合を誘発した現象である。それは近代語化の過程におけるアスペクト形式全体の通時的変化にとっても、かなり先駆的な現象であっただろう。ほぼ時を同じくして、「た」は過去の助動詞も統合したから、「てある」や「てゐる」はテンス形式の通時的変化にとってもかかわりをもつと予想される。完了表現の通時的変化に対する補助動詞「てある」や「てゐる」のかかわりは、その意味でむしろ別格であり、本稿の対象には収め切れない。

以下、本稿では古代語の「ぬ」「つ」の働き、および、それらの統合後に「た」が担った完了を表す働きとの関係を中心に、中世以降の補助動詞がどのようにそれらを補完し、分析化する役割を担ってきたかを探る。その可能性のある補助動詞としては、「はつ√はてる」「すます」「てのく√てのける」「てしまふ」などがある。それらの補助動詞ごとに、順次、完了の助動詞「ぬ」「つ」の働きや、それらを統合した「た」の働きとの関連性を見定めつつ、そ

の用法を検討していく。「ぬ」「つ」の統合に対する補完性やそれらの分担してきた領域における分析化を見きわめるには、古代語の「ぬ」が担った自然的な変化の終了と、「つ」が担った人為的な動作の完結との差が重要になるが、その点については別に私見を述べたので、ここでは原則としてその折の見方を踏襲する。

完了表現の通時的変化に関する補助動詞の補完性・分析化は、その用法の広がりを含めて、完了の助動詞の統合される過程からその統合後にかけて、次第に高まると予想される。ここに取り上げる補助動詞については、それを確認する手段として、上接語・下接語、および、その補助動詞の活用形による終止法・連体法・準体法の各用法の分布を中心に、その用法の広がりにも注意しよう。また、その用法における「ぬ」「つ」のそれとの共通性についても、補助動詞ごとになるべくまとめ、かんたんに言及するようにしたい。

なお、下接語については、原則として直下のそれに限定し、直下のその用法までは問わない。ただし、敬語の補助動詞・助動詞が直下に来る場合のみ、その敬語の直下に用いられた語も下接語と見なす。敬語はそれを除いても一般論として同様の表現が成り立つと見うるからである。ただし、どの補助動詞にも認められる語や用法、たとえば、

上接語としての動詞連用形、下接語としての接続助詞「て」、打消の助動詞、活用形の用法としての連用中止法などについては一々取り上げない。

研究史を顧みるに、完了表現の通時的変化にかかわる補助動詞の役割については、補助動詞「てしまふ」が、近世後期以降、古代語の「ぬ」「つ」の訳語として注意されてきたこと<sup>⑤</sup>、後に触れるように「てのける」も同様に用いられたことがあることぐらいいである。現代語の「てしまふ」に関する研究は多いが、史的観点からの先行研究は、その訳語としての関係を除いて、何も無いといえよう。補助動詞の通時的変化に関する研究自体きわめて乏しいが、完了表現の通時的変化にかかわる補助動詞の役割を探る本稿の企てに利用出来るような先行研究は見当たらない。

## 二 中世以降の「はつ」は「つ」は「す」

補助動詞「はつ」は、古代語では変化の終了の表現にも、動作の完結の表現にも用いられ、助動詞「ぬ」「つ」がともに共起していた。

- (1) 「……かく恐ろしげに荒れはてぬれど、親の御影とまりたる心地する古き住処と思ふに慰みてこそあれ」  
と(源氏・蓬生)

・つづばかりの言のかよひ、たえはてぬるなめりと思

すに、心細く(夜の寢覚・一)

(2) たゞ四五月のうちに、史記などいふふみはよみはてたまひてけり。(源氏・少女)

・宣旨の君の語りしさまは、まこと也けりと、心きよくあらはしはてつるかたは、すこし心おちる給にけり。

### (夜の寢覚・四)

しかし、中世鎌倉期頃を境に、補助動詞「はつ」は「つ」は「す」は変化の終了寄りの表現に偏ってくる一方、その頃から動作の完結寄りの表現には、補助動詞「すます」が登場してくる。個別に見ている限り、それらの動きはまだ完了の助動詞の統合と直ちに関連しそうには見えない。しかし、時期的に助動詞「ぬ」「つ」が「た」に収斂していく時期に、一方は「ぬ」が分担してきた領域に偏りを見せ、一方は「つ」が分担してきた領域に姿を表すのである。そのような両者の歩み寄りに見られる対応性に、完了の助動詞の統合に向けた推移を、補助動詞で側面から補完する時代の要求をうかがうのは、決して不自然なことではあるまい。後述するように、その後の完了表現の通時的変化には、補助動詞の用法の広がりからも、それによる補完と分析化が次第に高まっていくのがわかる。その流れから見て、「ぬ」「つ」が「た」に収斂していく時期に、それを補完する補助動詞の最初の動きが、あまりめだたない形で現れるのも

けだし当然であろう。まずは、そのような見通しのもとに、補助動詞「はつ√はてる」と「すます」について、順次取り上げる。

中世鎌倉期以降の「はつ√はてる」にも、文語的には古代語以来の語法も継承される。したがって、「つ」の領域に属した人為的な動作を表す動詞と共起する例もないわけではない。しかし、その例はたとえば次の例(3)のように打消と共に起して、一つの動作が未完了の時点で早くも他の動作が継起することを表す慣用句などに偏っているのである。

(3) 「などや宰相のもとより、今までしらせざるらむ」  
との給ひもはてねば、宰相殿よりとて使あり。(覚一)

本平家・二・少将乞請)

・「今出河の辺より世になし源氏参るや」といひもはてぬに、太刀打振り、わつとおめいて出で給ふ。(義経記・二)

このような慣用句や文語的表現の例を除けば、中世以後は自然的な変化を表す動詞と共に起する例のほうがはるかに多くなる。たとえば、『覚一本平家物語』に補助動詞「はつ」の例は六五例あり、そのうち例(3)のように瞬間的な継起を表す否定句の例は八例、それ以外の人為的な動作を表すと見うる動詞に付いた例は八例であるのに対して、自然的な変化を表しているとは見うる動詞に付いた例は四九例に

及ぶ。また、助動詞「ぬ」「つ」の使い分けから見ても、次のように「ぬ」とは共起しているが、「つ」と共起した例は六五例中に一例も見られなくなっている。

(4) 何事もかはりはてぬる浮世なれば、をのづからあはれをかけ奉るべき草のたよりさへかれはてて、(覚一本平家・灌頂・女院出家)

・御内の人々を擲取り、御謀反の次第を尋て、うしなひはて候ぬ。(覚一本平家・三・僧都死去)

右の第二例は、人為的な動作を表すと見うる動詞に付いた八例中に含めたものだが、「ぬ」との共起から見れば、この例も事柄自体はむしろ変化の終了寄りに表現されていると見るべきである。

このような分布傾向から、中世における補助動詞「はつ√はてる」は、上接動詞の意義傾向を越えて、事柄を変化の終了寄りに表現するものになってきたと見ることができよう。例(3)のように打消と共に起して瞬間的な継起を表す場合の表現性も、もちろんそれに含まれる。

補助動詞「はつ√はてる」は、室町期以降も変化の終了寄りの表現に偏る傾向を示すが、近世には例(5)のように「て」を介する「てはつ√てはてる」の形でも用いられている。

(5) ……と申ければ、上下大笑になりてはてた。(漸・

きのふはけふの物語・下・三二六)

・持仏堂とひとつに置所のない身となつてはてぬ。

(淨・世間娘氣質・序)

例(5)の「て」を介する形は、その頃の完了表現にかかわるより一般的な形式である後述の「てのく√てのける」に準じたものであろう。

「はつ√はてる」の上接語としては、次のように受身の助動詞の例が拾えるのが、相対的に注意を引く程度である。

(6)我身天理にたがひ、仏神に背き、世に捨てられ、人に疎まればて、かの災を払ふべき所なし(仮・浮世物語・五・五)

下接語としては、次のように仮定を表す接続助詞、完了・推定・推量を表す各助動詞の例が得られた。

(7)下りにはてば、勸賞蒙らむとこそおもひつるに、(覚一本平家・十二・泊瀬六代)

(8)一夜のうちに荒にしかば、天狗の棲となりはてぬ。

(覚一本平家・二・山門滅亡)

・因果晒しの物にならうにあきはてた。(淨・女殺油地獄・中)

(9)ながらへはつべき身にもあらずとて、(覚一本平家・八・太宰府落)

(10)「あはや、木曾が参り候ふぞや。このたびぞ世は失

せはてん」と申しければ(百二十句本平家・九・義経院参)

完了の助動詞が過去の助動詞とともに「た」に統合されて後は、共起する副詞その他の文脈によらない限り、完了と過去の区別はつけがたくなるから、「た」の働きは完了に代表させるものとする。すでにあげた例(5)も完了を表す助動詞の下接した例であった。

次に、活用形の用法には終止形による終止法、連体形による連体法の例が得られた。係り結びの連体形の結びによる終止法も、前者の終止法に準ずると見て併せて示す。

(11)枕をならべしいもせも、雲のよそにぞなりはつる。(覚一本平家・灌頂・女院死去)

・きんねん小用づまりで、さつぱり出ぬにはこまりはてる。(東海道中膝栗毛・六下)

(12)白地とは思へども、存生果る事もあり。(覚一本平家・一・祇王)

・あだし野の露きゆる時なく、鳥辺山の烟立ちさらでのみ住はつるならひならば、いかに物のあはれもなからん。(徒然草・七)

以上に取り上げた共起性については、古代語の完了の助動詞「ぬ」「つ」にも、それらに相当する用法が指摘できる。仮定については、「なば」「てば」「ぬとも」「つとも」

による仮定表現があつて、例(7)は「なば」に相当すると見  
うるだろう。完了の意は、その終止形「ぬ」「つ」のほか、  
「にたり」の連語でも表せた。例(8)の第二例はそれに相当  
すると見うる。「にけり」「てけり」の連語にも、それに相  
当する例が多い。推定の意には「べし」を下接する「ぬべ  
し」「つべし」があつて、例(9)は「ぬべし」に相当すると  
見うる。推量の意には「む√ん」を下接する「なむ」「て  
む」の連語による表現があつて、例(10)は「なむ」に相当す  
ると見うる。また、終止法・連体法に相当する用法として  
は、言うまでもなく終止形「ぬ」「つ」や、連体形「ぬる」「  
つる」がある。

さて、このように補助動詞「はつ√はてる」が変化の終  
了寄りの表現に偏ってくる中世鎌倉期頃には、それと連動  
するように、動作の完結寄りの表現に、補助動詞「すます」  
が台頭してくる。補助動詞「すます」の表現性には、上接  
する動詞の表す動作に、その効果において満足のいく完遂  
感を添える特徴がめだち、「はつ√はてる」が担った変化  
の終了寄りの表現が自然的結果的に事柄を捉えるのとは対  
照的である。

「すます」の上接語には、特に注意すべきものを見出だ  
せなかつた。下接語としては、(13)逆接の仮定を表すと見う  
る接続助詞「てから」、(14)完了・(15)意志を表す各助動詞の

下接する例が得られたにとどまる。

(13)たとへ思ひを遂すましてから、畢竟やくにもたゝぬ  
事を、愚痴におもひ明らめず、(盤珪仏智弘濟禪師御  
示聞書・上・二〇)

(14)「……」といふ今様を四五反うたひすましたりけれ  
ば、(覺一本平家・十・千手前)

・まんまと(酒ヲ)のみすまひた。(虎明本狂言・棒  
縛)

・彼盗人しすましたりと悦び、(嘶・雜物語・上)

(15)申すまさうとはぞんじて御ざあつたれ共、殿さまの  
御いせいにおそれて、けでん仕て申そこなふたと仰ら  
れひ。(虎明本狂言・今參)

このうち、意志を表す用法は、完了の助動詞「つ」に、  
意志を表す「む」との連語「てむ」による表現があり、例  
(15)はそれに相当すると見うる。

活用形の用法には、次のように終止法の例が認められた  
が、連体法、準体法の例などは見当たらなかつた。

(16)鞍馬のきのめづけ、牛房はべん、種々くさぐさの物  
がみちくゝであると思ふて、そのおときをおこなひす  
ます、爰を以て一念弥だ仏即滅无量さいとも、又あり  
がたければ、ざいともとかれたが、(虎明本狂言・宗  
論)

以上に見た補助動詞「すます」の用法は、文の成分の観点から見れば、仮定を表す場合も含めて、述語としての用法に偏っている。後述する「てしまふ」に認められる連体法を欠いている点などから見て、かなり現実のありように即し、動作の完結性を強調する場合に、その用途はまだ限られていたと言えるだろう。それに比べると、「はつゞはてる」の用法には連体法の例もあり、相対的にそのほうが広がりにも富む。しかし、中世に入って変化の終了寄りに狭まってきたとはいえず、文語的表現と口語的表現との区別も概してつけがたい。用法のより限られた「すます」との対応性から考えても、その用法の広がりには文語的な古い用法が尾を引いていることによる誤差をかなり見込む必要があるだろう。

ともあれ、口語の世界で完了の助動詞が「た」に収斂し、「ぬ」「つ」の分担が解消していく時期に、補助動詞「はつゞはてる」は変化の終了寄りの表現に偏るようになり、逆に「すます」は動作の完結寄りの表現を担うべく登場した。それらの変動は、かつての「ぬ」「つ」の分担基準を、部分的にもせよ、補助動詞の世界で引き受けようとする動きと解釈してよい。それらの補助動詞は、完了の助動詞の通時的変化を幾分か補完し分析化する役割を担ったと見て間違いないだろう。

なお、近世初期頃以降、次に示すように他動詞形の補助動詞「てはたす（て果たす）」も現れるが、これは動作の完結寄りの表現に限って用いられており、「すます」や後述の「てのく√てのける」と類義性の高い補助動詞と見ることができよう。

(17) にくいやつじや、それがしがくうてはたさう。(天理本狂言六義・首引)

・腹が立つたにより、ねてはたした。(仮・難波鉦・六)

### 三 室町期以降の「てのく√てのける」

室町期には、新たに補助動詞「てのく√てのける」が現れる。この補助動詞は、早くから多く「て」を介して用いられた。また、口語の世界で完了の助動詞が「た」に統合された後、その補助動詞は変化の終了寄りの表現にも、動作の完結寄りの表現にも適用されている。その意味でそれは「た」に統合された助動詞の完了の働きをより分析的に表す役割を担うに至った補助動詞の第一号と見てよい。

「てのく√てのける」についても、上接語には特に注意すべきものはない。

下接語については、(18)完了・(19)推量・(20)意志・(21)希望を表す各助動詞、および、(22)命令形などの命令を表す文末形



式の例が得られた。一部に「て」を介しない例もあるので、併せてあげる。

(18) 此間小智小見デ物ニ拘テアルヲ、子由ニ逢テ空尽シ  
打開シテノケタゾ。(四河入海・二二・三43オ)

・たちどころに屈強の者を十五人斬り伏せたれば、太刀の切つ先五寸ばかり打ち折つて捨ててのけた。(天草版平家・二・一一二頁)

・乳母は、……餅が喉に詰つて、つる死んでのけました。(浄・丹波与作待夜の小室節・上)

・ワシガ恋ヲバ……枕ヨリ外ニハ又ト知ル人モナカッタニ、涙ヲドウモエセキトメイデ、ツイトリハツシテモラシテノケタワイ。(古今集遠鏡・恋二)

(19) あのやうにほついては、ヤンがて身代は、木賊色よくまでおろすやうになつてのけふと笑ひける。(浄・心中重井筒・上)

・ソシテソノミヲツクシト云名ノトホリニ、身ヲツクシテシマウテノケルデアラウ(古今集遠鏡・恋二)

(20) 我ガ此間御史ノ獄ニ入ルハ此間我ガワルキ処ヲナヲシテノケン為ニセラル、モ仏ノ善巧方便ト同ジ事ゾ  
(四河入海・二二・三43ウ)

・くすしほどのものが、かみなりのれうぢをしらぬか。やうじやうせぜはひきさひてのけう。(虎明本狂言・

雷)

・まづこちらをしまふてのけうか。(浄・心中重井筒・上)

(21) たつもたゝれずいるもいられず／はぬけ鳥つるなき弓におどろきて 斯様に付けのけたく候。(至宝抄)

・聞けば聞くほど胸痛み、わしから先へ死にさうな。いつそ死んでのけたいと、泣くより外のことぞなき。

(浄・曾根崎心中)

(22) 弁慶がつぶりをわれてのけと、二三度こそは張られたれ。(室町物語・弁慶物語)

・そんなら火箸で焼いてのけ。(浄・心中重井筒・中) 完了を表す例(18)の第一・三例は変化の終了寄りの表現である。第二・四例は、動作の完結寄りの表現と見うるものである。第二例(天草版平家の例)は、百二十句本の対応箇所「捨ててげり」と、助動詞「つ」が「けり」とともに用いられているのを、原文と見込めるその口語訳である。第四例(古今集遠鏡の例)も、「もらしつるかな」と助動詞「つ」が用いられた古今集歌の口語訳である。

推量を表す例(19)の第二例は、『古今・恋二』の「君恋ふる涙の床に満ちぬればみをつくしとぞ我はなりける」の第四五句の補訳部分であり、これは後に取り上げる補助動詞「てしまふ」に「てのく／＼てのける」が下接したためらし

い例である。この例における「てしまふ」と「てのける」の承接には、相対的に「てのける」のほうにより強い現実的な判断性・情意性がうかがえよう。富士谷成章の『あゆみ抄』や本居宣長の『古今集遠鏡』の訳し方に照らしても、「てしまふ」はその出現後、まずは「ぬ」に当たる変化の終了寄りの訳語に多く用いられたが、それに対して、「てのく√てのける」による完了の助動詞の訳例は、今のところ、例(18)の第四例一つである。しかも、これは「つ」に当たる動作の完結寄りの表現であった。「てしまふ」と「てのける」の共存する時期には、相対的に「てしまふ」のほうが変化の終了寄りに適し、「てのける」のほうがそのより強い現実的な判断性・情意性から、むしろ動作の完結寄りに適すると見られた可能性<sup>33)</sup>がある。

以上に取り上げた用法のうち、希望・命令を表すものはこれまでの補助動詞には認められなかった。古代語の「ぬ」「つ」の用法と対照させて言えば、希望の意はたとえば「にしかな」「てしかな」の連語が、それぞれ「ぬ」「つ」を含む形で表すことができたし、命令の意はその命令形「ね」「てよ」で表すことができた。そう考えると、「てのく√てのける」において、すでに古代語の完了の助動詞に相当する用法の広がりはかなり認められることになる。

活用形の用法には、次のような終止形による終止法の例

がある。

⑳ 惣じて貴人大人へは、何に限らずかやうの珍しき物、お目かけぬが料理の習ひ、……お国自慢のお咄の上、ふと余国より御所望の時、跡へも先へもいかず、国中を尋ねても有合せず、おのづから殿様を嘘つきにしてのける。(浄・心中宵庚申・上)

この例は、一般論として奉公人の思慮不足が「殿様を嘘つきにしてのける」と、奉公人の対処のしかたにその責めを認める言い方をしたものである。意図的な動作の表現ではないが、主体に責めを認める動作の表現には、例(18)第四例の原文「もらしつるかな」などもそうであるように、古くは助動詞「つ」で表された。そのような「つ」の用法は、意図的な動作の表現に対するいわば擬制であり、その意味でやはり人為的な動作の完結寄りの表現と見ることができよう。

なお、次のように終助詞の下接する文末用法も、用法としては終止形終止法に近い。この例は変化の終了寄りの表現の例である。

㉑ 言ハ水ハ春ニナリテハ無真堅シテヤガテトケテノクルゾ(四河入海・八・三1オ)

さて、室町期に現れた「てのく√てのける」には、見えてきたように変化の終了寄りの表現と動作の完結寄りの表現

とが共存していた。補助動詞における両者の共存は、古代語の補助動詞「はつ」にも認められたが、古代語における「はつ」のそれは、助動詞「ぬ」「つ」などの分担体制に支えられた時期のものであるから、それらの助動詞が「た」に統合された室町期における共存とは、まったく意味が異なる。「はつ」は「はつはてる」と「すます」も、「た」への収斂の進行する時期においてこそ、先述の分担傾向によって助動詞の変化を補充する意味をもちえたが、統合された助動詞「た」が変化の終了と動作の完結の差を越え、それらに共通する完了の意を担うに至った室町期の口語では、その完了の意をまとめてより分析的に表示することこそ、補助動詞に対する新たな要請になったと考えなければならぬ。そういう要請には、統合された完了の助動詞「た」に見合う形で、変化の終了も動作の完結もともに分析化する能力こそ求められたであろう。

しかも、助動詞「た」が完了の助動詞「た」と呼ぶにふさわしい時期は短い。過去の助動詞「き」「けり」が、連体形の終止形同化によって「きし」「けりし」になる段階から、それらが「たり」と複合して「たりし」になった「た」や「たりける」は「たける」という過程のもとに、口語の世界で「た」に収斂してしまうのも、同じ室町期の出来事である。その点も含めて考えれば、補助動詞で完了

の意をより分析的に表すことを求める時代の要請は、いっそう強くなったはずなのである。

室町期に現れた補助動詞「てのく」は、そのような時代の要請をうけて、すでに統合された完了の助動詞「た」に対し、さらには完了と過去の助動詞「た」に対して、その完了の意をより分析的に表示する役割を担ってこそ登場したと見てよいだろう。したがって、かつての完了の助動詞の分担体制を基準にして見るとき、室町期に現れた補助動詞「てのく」の用途が、変化の終了寄りと動作の完結寄りの両者にまたがるのは当然のことといえる。

なお、文の成分の観点から見れば、以上に見た補助動詞「てのく」の用法も、述語としてのそれになお集中している。後に述べる「てしまふ」の用法に比べれば、同じ完了の意をより分析的に表すとはいえず、「てのく」の使用は、まだ現実のありように即して完了の意を分析的に表す場合に限られていたのである。すでに述べた「てしまふ」との相対関係におけるより強い現実的な判断性・情意性も、同じことをその補助動詞の表現性に即して言い換えたことになるだろう。

なお、「た」に統合された完了の意をより分析的に表す役割を担った「てのく」の登場も、その時期以

降の補助動詞に、変化の終了寄りの表現と動作の完結寄りの表現の差にかかわる意義を示す必要がなくなったことまでは意味しない。その差にかかわる鎌倉期以降の「はつ▽はてる」や「すます」の分担傾向も、すでに触れた通り、近世にも継承されているからである。次に述べる「てしまふ」の出現後、相対的に「てしまふ」が変化の終了寄りに適し、「てのける」のほうがむしろ動作の完結寄りに適すると見られた可能性があることもすでに述べたところである。

#### 四 近世以降の「てしまふ」

補助動詞「てしまふ」が現れたのは、近世中期である。

「てのく▽てのける」より後れて現れ、やがてそれに取って替わって、完了の意をより分析的に表す標準的な補助動詞になったものであるから、変化の終了寄りにも、動作の完結寄りにも適用されたことはもはや言うまでもない。よって、ここではその差についての言及はなるべく省略する。

動詞「しまふ」に由来する補助動詞には、これと並んで、「て」を介せず動詞連用形に直接付く補助動詞「しまふ」もあるが、より文語的と見てよいだろう。ここではそれぞれ「てしまふ」に含め、併せてその例を示すにとどめる。

「しまふ」の形には、打消の補助動詞に付く「ずにしまふ」

「ないでしまふ」という言い方もある。その言い方の「にしまふ」「でしまふ」にも、「てしまふ」に相当する補助動詞性を認めてよいと思う。よって、「にしまふ」「でしまふ」は、その上接語の影響による「てしまふ」の変異と見なし、併せて言及することにしよう。「てしまふ」は尊敬語としては「ておしまひだ」「ておしまひになる」などとなり、逆にくだだけた言い方では、転じて「チマウ」「チャウ」ともなるが、それらの例も併せて示すことがある。

まず「てしまふ」の上接語については、次のように(25)受身・(26)使役の補助動詞の例があること、および、「てしまふ」の変異と見てよい「にしまふ」「でしまふ」にそれぞれ打消の補助動詞(27)・(28)が上接することに注目してよい。

(25)其疑ひは一時限り何処かへ葬むられて仕舞つた。

(夏目漱石・こゝろ・上・十)

・鶴は飛ばうとした瞬間、こみあげてくる水の球に／喉をつらぬかれてしまった。(丸山薫・噴水・帆・ランプ・鷗)

・「そんなことを言ってみろ、当節のされちまうから」

(曾野綾子・太郎物語大学編・四・4)

(26)こないいお母さまを、私と直治と二人でいぢめて、困らせ弱らせ、いまに死なせてしまふのではなからう

かと、(太宰治・斜陽・三二)

⑦おらアいそがしくて見ずにしまふス(滑・浮世床・初・下)

・どうしてもさつぱりわからずにしまつても、その中  
おとつさんも亡後なくなるし、(人・春色梅児誉美・三・十一)  
・其度毎に私は躊躇して、口へはとうく出さずに仕  
舞つたのです。(夏目漱石・こゝろ・下・十六)

⑧さうなると義兄や上の姉が代る代る口を酸くして頼  
むやうにして勧めても、最後まで「うん」と云ふこと  
を云はないでしまつた。(谷崎潤一郎・細雪・上・二)

古代語の完了の助動詞にも、「けさはしも起きけん方も  
しらざりつ」(古今・恋三)などの「ざりつ」という言い  
方がある。打消の助動詞を上接語とする用法はそれに相当  
すると見ることができよう。「てしまふ」に先行する補助  
動詞には、打消の助動詞を上接語とする用法は認められな  
かっただけに、この用法は、完了表現にかかわる「てしま  
ふ」の用法の広がりとして注目してよい。

次に、下接語や活用形の用法の広がりについて述べる。

それには理由や仮定を表す接続助詞、指定・完了・推定・  
推量・意志・希望を表す各助動詞、勧誘の文末形式、命令  
形を含む命令の文末形式、終止法、連体法・準体法などの  
例が得られる。多岐にわたるので、適宜に区分しながら、  
その広がりを見ていく。

接続助詞の下接語については、理由と仮定を表す接続助  
詞の下接しにばって取り上げる。理由のそれについては、  
先行の補助動詞にその例を見ないからであり、仮定につい  
ても例の見当たらないものがあつたからである。理由を表  
す語の下接した例には次のような例が得られた。

⑨私ほどふで今に死でしまふから。米八さんと中をよ  
くなさいまし。(人・春色梅児誉美・三・十三)

・そんなら云つて仕舞ふから宜い。(二葉亭四迷・浮  
雲・三・十)

第一例の接続助詞「から」は根拠を表すともいえよう。  
これらの例の「てしまふ」は断言的な言い方ながら、内容  
的には未実現の事柄であり、第一例は推量表現に、第二例  
は意志表現にそれぞれ相当する点がある。

仮定を表す接続助詞の下接した例には次のようなものが  
ある。例⑩は順接の仮定表現、⑪は逆接の仮定表現である。

⑩いつそのことに、何も訳はねへ、おれひとり坊主に  
でもなつてしまやア双方静に納りも付し、(人・春色  
辰巳園・三・四)

・死んでしまへばもうそれまで、(伎・鼠小紋東君新  
形・二幕目)

・いつそ思ひ切つて、本職の不良になつてしまつたら  
どうだらう。(太宰治・斜陽・三)

(31)それで私を殺してしまつてもいい。(中原中也・盲目の秋・『山羊の歌』)

次のように助動詞「う」が付く形から「ものなら」に続く表現なども、併せて仮定する用法と見ることが出来る。

(32)僕が旅にでも出て了はうものなら、後は奈何なるか知れない。(島崎藤村・春・二)

このうち、仮定を表す下接語の例は、「はつ√はてる」「すます」にはあつたが、「てのく√てのける」には見当たらなかった。

次に、(33)指定(断定)・(34)完了・(35)推定・(36)推量・(37)意志・(38)希望の順に、その意を表す助動詞の下接する例をそれぞれ示す。

(33)今に見ねへよ、なけなしの金を捨て、ちつとばかりの株家督を他の手に渡してしまふだ(滑・浮世床・初・中)

・粥ばかり食つてゐると、それ以上の堅いものを消化す力が何時の間になくなつて仕舞ふのださうです。

(夏目漱石・こゝろ・下・二十四)

・このマスクをかけてゐると、舌の痛みが消えてしまふのですよ。(太宰治・斜陽・三)

(34)命危しと聞及びしが、いかう重いか、但し無常の夕霧と、きえうせてしまふたか。(浄・夕霧阿波鳴渡・

上)

・彼侍が豊後ぶして、小胸がわるふなつて来て、折角ちそうの江戸りやうりを、皆もどして仕廻ふたぞや。

(談・当世下手談義・五)

・「え、うるさい、どうなと勝手におし、」と賺されて仕舞ツた。(二葉亭四迷・浮雲・三・十八)

・今の私には全然さういふ事はなくなつて了つた。

(志賀直哉・邦子)

(35)折角の美しくさが、其為に破壊されて仕舞ひさうで私は怖かつたのです。(夏目漱石・こゝろ・下・五十)

(36)あすこのやてへばねは、をゝかたあいつが、くらしいつぶしてしまふだらう。(酒・総籬)

・左様お言ひでも、一冊も聞てお在の間に寐てお仕まひだらう。(人・英対暖語・二・八)

・人に引上られて見ねへ、何かのことはみんなばれて仕廻ふだらう。(伎・与話情浮名横櫛・序幕)

(37)これはいつその事源次郎お国の兩人を槍で突き殺して、自分は腹を切つてしまはう。(三遊亭円朝・牡丹

燈籠・五)

・糞ツ今夜言ツて仕舞はう。(二葉亭四迷・浮雲・一・四)

・いつそ早く東京へ出てしまはうかと思つたりした。

(夏目漱石・こゝろ・中・七)

③梅川殿へも吹込んで、此方から挨拶切り、嶋屋の客にさらりつと請させてしまひたい。(浄・冥途の飛脚・中)

・ア、モウ死んでしまひたい。(人・春色梅児誉美・

二・八)

・わたしやそれが悲しうて、いつそ死んでしまひたい。

(坪内逍遥・桐一葉・第五段)

例③の指定を表すものについては、「だ」「のだ」「のです」の例をまとめてあげた。

ちなみに、助動詞「た」に近い下接語としては、補助動詞「てゐる√てゐる」の下接した例もある。この場合の「てゐる√てゐる」は、「てしまふ」による完了した状態が結果として存続するさまを表すと見てよからう。

③(彼)の男が考へる時分には、最早一步踏み出して完了してつてる。(島崎藤村・春・二)

・縮んでしまつてゐるセーターはそのままもち上り、ずり下つたズボンとの間に、おへそが覗いた。(曾野綾子・太郎物語大学編・三・一)

古代語では助動詞「たり」が「てゐる」と同様の意を表せたが、完了の助動詞「ぬ」にもその「たり」を下接する「にたり」があることはすでに述べた。「てしまつてゐる」

式の言い方は、それに相当する意を、二つの補助動詞によつてより分析的に表していると見うる。ただ、助動詞「た」も例④の第一・四例などのように、結果の存続の意も表しうるから、「てしまつてゐる」式はそのより分析的な言い方ということになる。

次に、命令形を含む命令の文末形式の例を示す。

④お給仕に差合はう、夕飯早うくしてしまよと、(浄・

大経師昔暦・上)

・うぬらも一つ穴のむじな、逃した先をぬかしてしまへ。(伎・与話情浮名横櫛・序幕)

・「おまへたち、あの宮をこはしてしまへ、私は三日の間に、また建て直してあげるから。」(太宰治・駆け込み訴へ)

この第一例は「くうてしまひやれ」のつづまつた形である。

以上に取り上げた指定以下の下接語などのうち、完了・推定・推量・意志・希望・命令のそれは、先行の補助動詞にもすでに認められた。指定の助動詞「だ」「のだ」の類の下接だけは見られなかったが、古代語の完了の助動詞「ぬ」「つ」にも、「ぬるなり」「つるなり」の形でそれに相当する用法があることは言うまでもない。「てしまふ」の用法の広がりには、その点で「てのく√てのける」以上に、

古代語の完了の助動詞のそれと匹敵するようになったと言えよう。

補助動詞の活用形の用法としては終止法・連体法・準体法の例があった。まず終止形の終止法には、次のような例がある。

(41) 今夜もう一度火事があれば好い。さうすれば人手にわたらぬ前に、すつかり雛も焼けてしまふ。(芥川龍之介・雛)

・どうもかう寒いとくしやみばかり出て、せつかくの恋の道行もコメディになつてしまふ。(太宰治・斜陽・六)

(42) 兄上は屹度不届な奴、相助を暇にしてしまふと仰しやつてお暇に成るだらう。(三遊亭円朝・牡丹燈籠・九)

・其様な事お言ひなさるなら匿したつて仕様がな、言つて仕舞ひます……言つて仕舞ひますとも……」(二葉亭四迷・浮雲・二・十二)

(43) 死ナル迄ニモウ一度本膳デ御馳走ガ食フテ見タイナド、云フテ見タトコロデ今デハ誰モ取リアハナイカラ困ツテシマウ(正岡子規・仰臥漫録・明治三四・九・二九)

・シゲゲにいつもかいてやつてゐる漫画、つい私まで

噴き出してしまふ。(太宰治・人間失格・第三の手記・一)

終止形の終止法はいずれも断言的であるが、(41)は假定条件や一般条件の結果を表しており、変化の終了寄りの表現で推量表現に相当する点がある。(42)も未実現の事柄であり、意志表現に相当すると言えよう。(43)は変化の終了寄りの表現であるが、これらの例では情意性を強調する役割も担っているようである。

推量表現や意志表現に相当する、このような終止形終止法の一部は、すでに「てのく√てのける」にも認められたが、まだ例はなかり限られていた。その用法がさかんになるのは、「てしまふ」においてである。それに相当する終止形の用法は、古代語における助動詞「ぬ」「つ」にも認められるので、これらの「てしまふ」の用法は、その意味でも古代語の完了の助動詞に匹敵する広がりを見せるようになったと言える。

なお、終助詞を下接する次のような文末用法も、終止法に近いものである。

(44) 今にだれぞ来て泣ごとをいふか、くるしいはなしをして見や、それこそ自分のことは忘れて、持て行なましなんぞと言てほふり出してしまひなさらア。(人・

春色梅児誉美・四・二十三下)



・その代りおれの眷属たちが、その方をずたずたに斬つてしまふぞ。(芥川龍之介・杜子春・四)

(45) ヤイふんばりめ、うぬ、あごがすぎると、たゝつころしてしまふぞ。(嘶・聞上手)

・それでもおれがわりといふなら死んでしまはア。

(人・春色辰巳園・初・五)

・私ならすぐ下宿か何かして仕舞ひまさア。(二葉亭

四迷・浮雲・三・十七)

例(44)は推量表現、(45)は意志表現にそれぞれ相当し、すでに触れた終止法の例(41)・(42)にそれぞれ近いものである。

「てしまふ」には、次のように実質名詞にかかる純然たる連体法の例(46)や、準体句(準体助詞「の」を伴うものを含める)を構成した例(47)もある。それらはこれまでに触れた補助動詞には、見当たらなかったものである。

(46) しかし其でも小狐家を出て了ふ気にはならなかつた。

(二葉亭四迷・平凡・三二)

・けふのうちに／とほくへいつてしまふわたくしのい

もうとよ(宮沢賢治・永訣の朝・『春と修羅』)

(47) 日本人の五十にもなると老衰<sup>オロシ</sup>で仕舞ふのとは、比べ

ものにならぬ。(末広鉄腸・雪中梅・下・八)

・只此儘で自分の此氣持を濁<sup>シ</sup>まして了ふのは何となく惜しい気がした。(志賀直哉・暗夜行路・一・四)

古代語の完了の助動詞「ぬ」「つ」にも、連体形「ぬる」「つる」による連体法や準体法があるので、「てしまふ」の用法の広がりには、その点でも古代語の完了の助動詞に匹敵するようになったと言える。

以上のように、完了表現にかかわる補助動詞として取り上げたものの中では、「てしまふ」の用法がもっとも広いことを明らかにした。「た」による統合後の完了表現を最初に補完した「てのく√てのける」に比べても、その広がりにはきわめて顕著なものと云ってよい。

## 五 結 び

古代語の完了の助動詞「ぬ」「つ」は、中世に入って「た」に収斂し、室町期には過去の助動詞とともに「た」によって統合された。その収斂と統合を中心とする助動詞の通時的変化に対応するように、補助動詞にはアスペクト的な完了の意をより分析的に表すことによって、助動詞の通時的変化を補完する動きが芽生え、助動詞の働きを肩代わりしていく推移が次第に顕著になる。

その補完的な動きとして最初に注意してよいのは、古くは「ぬ」「つ」のいずれとも共起できた補助動詞「はつ√はてる」の使用が、中世鎌倉期頃から「ぬ」の分担してきた変化の終了の表現に偏ってくる一方で、動作の完結

寄りの表現に補助動詞「すます」が登場する現象である。それらの補助動詞は、まだかなり部分的ながら、それぞれ「ぬ」「つ」の分担傾向に沿って、それらの意をより分析的に表す役割を担い、「ぬ」「つ」が「た」に収斂していく通時的変化を補完したと見ることが出来る。

室町期に現れた「てのく√てのける」は、すでに完了の補助動詞を統合し、さらに過去の補助動詞も統合した「た」に対して、その完了の意をより分析的に表す役割を担った。近世中期頃までを中心とするその用法には、すでにかなりの広がり認められ、古代語の「ぬ」「つ」の用法の広がり比べても、現実には即した表現性を中心にその半ばには相当するものが認められる。

近世中期に現れた「てしまふ」の用法には、「てのく√てのける」には見られなかった使役の補助動詞を上接語とする例や、打消の補助動詞を上接語とする「にしまふ」「でしまふ」の形も現れ、また、仮定を表す語を下接する用法や、連体法・準体法などが加わるほか、終止法もさかんになった。総合すれば、補助動詞が幅をきかせていた古代語の完了表現における「ぬ」「つ」の用法の広がり比べて、優るとも劣りはしない広がりそなえるに至っている。

最後に、ここで取り上げてきた主要な補助動詞別に、その上接語・下接語、活用形の用法などの有無を○と×で示

すと、下の表のごとくになる。

この表を○の多  
少だけで見れば、  
古い「はつ√はて  
る」の用法の広が  
りがめだつことに  
なるが、そこには  
古代語におけるそ  
の用法の広がり  
が文語的に尾を引  
ている可能性があ  
るので、「すます」  
との対応性を考慮  
してその意味の誤  
差を見込む必要が  
ある。「た」によ  
る統合後に現れる  
補助動詞「ての  
く√てのける」と  
「てしまふ」につ  
いては、後者の用

表 補助動詞別の用法の広がり

用法 補助動詞	上接語			下接語と活用形の用法											
	受身	使役	打消	理由	仮定	指定	完了	推定	推量	意志	希望	命令	終止法	連体法	準体法
「はつ>はてる」	○	×	×	×	○	×	○	○	○	×	×	×	○	○	×
「すます」	×	×	×	×	○	×	○	×	×	○	×	×	○	×	×
「てのく>てのける」	×	×	×	×	×	×	○	×	○	○	○	○	○	×	×
「てしまふ」	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

法の広がりにより大きくなっており、時代とともに後退してきた助動詞の役割を補完し、アスペクト的な完了の意を分析的に表す役割を、その出現順に高めてきたことが確認できよう。

## 注

(1) 山口義二「完了辞・過去辞の通時的統合——「た」への収斂——」(川端善明・仁田義雄編『日本語文法体系と方法』平成九年、ひつじ書房)。

(2) (1)に同じ。

(3) このほか、動詞「うす(失)」「きる(切)」などにも、他の動詞連用形に付いてその表す変化や動作の完了に近い意を担うことはあるが、それらの下接できる動詞の範囲は狭く、それだけ助動詞の変化の補完性は乏しい。また、動詞「あふ(飲)」「やる(遣)」なども、多く打消と共に起して補助動詞的に先行動詞の完了(未完了)に近い意を担うことがあるが、完了の助動詞には打消の助動詞は下接しないから、これも助動詞の変化に対する補完性を探る上では除外してよい。

(4) (1)に同じ。念のため、そこで採用した説明法の要点に再度言及すれば、古代語の時代は、いわゆる自然界の変化にも人間の情意を想定しえたり、逆に人間の動作も自然的変化として捉えられることが多い。ここにいう「変化」と「動作」の分類の細部については、古代語を支えていた世界観を想定しての分析が必要であるとの見通しに立っている。

(5) 『あゆひ抄』に「ぬ」を次のごとく「てしまふ」と訳して

いることなど、よく知られるところである。

〔何ぬ〕……したしくいはば、さはあるがたからんとおぼゆる事の、終に成りたるやうの心なり。里へてしまふ〔だんになる〕へやうになる〕又所によりてはへてしまふた〔様に成た〕と「た」もじをくはへても心うべし。

ちなみに、「つ」については、次のように「たぞ」と訳しながら、里言との違いに注意するのみである。

〔何つ〕……里へたぞ〕といふ。たゞしへたぞ〕といふこと、里には人にむかひてのみいふを、歌にてはひとりごとにもいふべし。

(6) 金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』(昭和五十一年、麦書房)などにその一端がうかがえる。

(7) たとえば、次のような例がそれである。

・人の恨みも負ふまじかりけり、といとどあやふくおぼし  
こりにたり。(源氏・葵)

(8) 橋本進吉「助動詞の研究」第七章(助詞・助動詞の研究)に次のような言及があり、この傾向に通じそうだが、やや唐突な指摘にとどまっているので、宣長訳との関係の有無などは不明である。

さうして、「つ」は有意の動作につく事が多いのは事実である。それをヤツテノケルといふやうな意味があるのであるまいか。(三六八頁)

(9) (1)に同じ。

(10) たとえば、次のような例をそれと見てよい。

・「はや船に乗れ。日も暮れぬ」(伊勢・九)  
・今ノ如ンバ、敗軍ノ兵ヲ駆集テ何度ムケテ候トモ、ハカ

六) ぐシキ合戦、ツ共不覚候。(慶長八年十月活字本太平記・)